薔薇回廊

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇回廊

【Ｎコード】

Ｎ０１００Ｅ

【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】

果てしなく巡る巡る世界にボクは迷い込んだ。ようこそ薔薇回廊へ。

ボクはそこがどこだかわからなかった。
左右は緑の壁に囲まれ、石畳の廊下は蛇のように曲がりくねり、どこまで続いているのかわからない。
芳しい薔薇の匂いが鼻を突く。
壁は薔薇の蔓で形成され、ピンク色の薔薇たちが咲き誇っていた。
――薔薇回廊。そんな名前が頭を過ぎる。
行く当てもなく、ボクは薔薇回廊を彷徨い続けた。
昼も夜もなく、時間の流れはわからない。
倦怠感が身体を覆うが、それは疲れとは違う。
胸が苦しく、吐き気を催すが、全ては自分の思い過ごしだったと気づかされる。
全ては幻で、全ては現実だった。
ここがどこかだかわからない。だが、そんなことは、どうでもいいことだった。
ボクの頭の中は空虚の怪物に侵食されていく。
どのくらい歩いたのだろうか。
もしかしたら、この場でじっと立ち止まっていたのかもしれない。
なにかを探すでもない。だから、歩く必要もなかった。
空を見上げる。だが、そこには青空はない。あるのは灰色の空。
淀みが揺ら揺らと炎が瞬くように蠢いている。
空だと思っていたものは空ではなかった。それは蟲の大群だった。
小さな虫たちが空を羽ばたいている。そう思うと、耳障りな羽音が聞こえてくる。
耳障りな蟲たちはいらない。
蟲たちがぼとぼとと地面に落ち、そして燃え上がって死んだ。
陽炎は美しく、妖艶とした輝きと揺らめきに薔薇回廊が包まれた。
薔薇は決して燃えなかった。そう、炎は薔薇を包み込んでいるが、

薔薇の美しさには劣る。
炎の中で誰かが涙を流している。
すすり泣く声を聞いたボクには少女が見えた。
炎の中で少女がうずくまって泣いている。
ボクはが少女を抱きしめると、少女だったものは死体に変わり、
ボクの身体が真っ赤な血に染まった。
血の香りが辺りを包み込み、少女だったものからは蛆が湧き、やがて少女だったものは灰に塵に変わった。
朽ち果てる砂はボクの身体を擦り抜けて、風と共に去っていった。
風は高笑いをあげて、全てを嘲る。
炎と血は薔薇を彩り、死は生を与えた。
そう、ボクはいかなくてはいけない。
だから、歩いた。
薔薇回廊がどこまで続いているかは、ボクは知らない。
もしかしたら、永遠に続いているのかもしれない。
初めは終わり。
そうだ、ボクは少女を探さなくてはいけない。
薔薇回廊はどこまでも続いている。
左右は薔薇の壁に囲まれ、空には蟲が羽ばたいている。
そして、少女がどこかで泣いている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0100e/

薔薇回廊

2011年1月5日18時15分発行